世界を驚かせた金色の暴君

オルフェーヴル伝説

小川隆行
ウマフリ

その走り、まさに異次元!

Interview
池江泰寿
調教師ほか

日本の競馬史上、最も破天荒な三冠馬。
世界の頂点に最も近づいた**歴代最強馬の伝説**

オルフェーヴル伝説

世界を驚かせた金色の暴君

小川隆行＋ウマフリ

星海社

327

SEIKAISHA SHINSHO

はじめに

２０１０年代、規格外の三冠馬が世界を驚かせた。

２勝目までに四度の敗北を喫しながらも、重賞初制覇からは怒濤の連勝。クラシック三冠と有馬記念を制して年度代表馬に輝いた。史上７頭目の三冠馬、オルフェーヴルである。

圧倒的な強さを見せつける一方で、ゴール後に騎手を振り落とす、レース中に逸走するなど、その破天荒な振る舞いからも注目を集めた。歴代最高クラスの才能、そして賢さゆえの個性溢れるキャラクター性。今回は走るのか、それとも走らないのか。凱旋門賞では二度の２着、ラストランの有馬記念では８馬身差の圧勝。国内外のファンを、関係者を、常に驚かせ続けた。この馬が一番強いとわかっていても、最後の直線まで目が離せない。驚くような負け方をしても、完璧な勝ち方をしても、どこか納得させる不思議な魅力があった。

オルフェーヴルは、果たしてどれほどまでに強かったのか。

関係者や当時のメディア、そしてファン目線から、稀代の名馬オルフェーヴルの強さ、そして魅力に迫りたい。

目次

はじめに　3

第一部　オルフェーヴルかく戦えり　8

最強を証明し続けた遥かな旅　文・構成／手塚瞳

2010―2011　新馬戦―スプリングS　8

2011　クラシック三冠―有馬記念　20

2012　阪神大賞典―凱旋門賞―ジャパンC　34

2013　大阪杯―凱旋門賞―有馬記念　48

第二部

一族の名馬と同時代のライバルたち 64

［一族の名馬たち］

ステイゴールド 66
メジロマックイーン 68
ドリームジャーニー 70
オリエンタルアート 72
8号族 74

［同時代のライバルたち］

ウインバリアシオン 76
ゴールドシップ 78
ジェンティルドンナ 80
ホエールキャプチャ 84
グランプリボス 86
レッドデイヴィス 88
トーセンラー 90
ギュスターヴクライ 92
ビートブラック 94
ベルシャザール 96
サダムパテック 98
アヴェンティーノ 100

［主な産駒たち］

マルシュロレーヌ 102
ウシュバテソーロ 104
ラッキーライラック 106
エポカドーロ 110
オーソリティ 112
シルヴァーソニック 114
メロディーレーン 116

第三部

オルフェーヴルを語る 118

血統 競馬評論家／栗山求 120
馬体 『ROUNDERS』編集長／治郎丸敬之 126
育成 Tomorrow Farm 齋藤野人氏に聞く 130
厩舎（前・後編） 池江泰寿調教師に聞く 134
海外遠征 森澤光晴調教助手に聞く 142
種牡馬 社台スタリオンステーション 上村大輝氏に聞く 146

第四部 オルフェーヴルの記憶 150
震災の年の三冠馬は「希望の星」 152
オルフェーヴル産駒の狙い目 156
穴党予想家が振り返る「オルフェの印」 160
記者席で見た「阪神大賞典の逸走」 164
国内外で異次元名馬が生まれた世代 168
歴代三冠馬を生まれ月で比較する 172
座談会 語り尽くそう！ オルフェーヴルの強さと激しさを 176
おわりに 188
執筆者紹介 190

写真／夏目伊知郎、フォトチェスナット、アフロ
本書中の表記は2025年2月現在のものです。

第一部

オルフェーヴルかく戦えり

最強を証明し続けた遥かな旅

名馬の全弟に過ぎなかった存在が
クラシックへの道を突きすすむ。
黄金色の旅は始まったばかり

文・構成／手塚瞳

スプリングSはデビュー6戦目＝歴代三冠馬の中でナリタブライアン（7戦）に次ぎ2番目の遅さとなる重賞初優勝。三冠馬になるとは誰も予想できなかった…。

2010–2011
新馬戦—
スプリングS

奇跡の巡り合わせ

もしかしたら、オルフェーヴルはこの世に生まれていなかったかもしれない。

オルフェーヴルの父はステイゴールドだが、当初、母・オリエンタルアートの交配相手はディープインパクトを予定していた。ディープインパクトは種牡馬入り初年度の期待馬、後にオルフェーヴルを管理することになる池江泰寿調教師が自ら頼んでのことだった。

ところが3回も不受胎が続いてしまう。そこで白羽の矢が立ったのが、オリエンタルアートの初仔ドリームジャーニーと同じ配合、ステイゴールドだった。ドリームジャーニーはGⅠ3勝、期待の持てる血筋。幸い、1回で受胎に成功した。

こうして2008年5月14日、奇跡の巡り合わせを経てオルフェーヴルはこの世に生を享けた。

サラブレッドとしては遅生まれだったため、仲間内ではいじめられっ子だった。しかし成長するにつれて次第に、「周りの馬には負けないぞ」という自我が芽生え始めていった。ついには威張り散らし、ちょっとでも嫌なことがあると、ゴネては蹴りまわすようになっていった。

1歳になった頃、ある男がオルフェーヴルの姿を偶然、目の当たりにしていた。その男こ

そ後にコンビを組む池添謙一騎手だった。自らの騎乗馬を見に牧場を訪ねたところ、たまたまオルフェーヴルがいたという。池添騎手は直感する。

「いい馬かどうかはわからない。でも、将来乗れれば良いな」

その後2歳になったオルフェーヴルは兄ドリームジャーニーと同じ池江師の下に入厩する。この時池添騎手は自らオルフェーヴルに騎乗したいと志願した。

「先生、（新馬戦は）どこ使うんですか。僕、新潟でもどこでも行きますんで」

あの日出会っていなかったら、この時名乗り出なかったら、どうなっていただろう。

入厩後のオルフェーヴルは幼少期とうって変わって、大人しくてとても扱いやすい馬だったという。けれどそれも、最初の数週間だけだった。ゲート試験に受かった頃からオルフェーヴルは急にやんちゃなところを見せ始める。猫をかぶっていただけだった。幼い頃に身につけた自我が弾けた。主張は頑として譲らない。馬運車にも乗りたがらないし、洗い場にも入りたがらない。

ＧＩ馬の全弟という肩書もありデビュー戦は注目こそ集めたが、わがままはレースでも同様だった。パドックに出ればちっとも落ち着かない。担当者が一人で曳いていたが、急遽池江師も交えて二人曳きに。ゲートに入れば、他の馬を恋しがってヒーヒー啼（な）いてばかり。レースが始まってみれば、どこかふわふわしてばかり。

ところが残り４００ｍ、池添騎手がひとたび追うと突然オルフェーヴルは反応した。この時先頭は10秒5もの速いラップを刻んでいたが、それよりも速く追い上げ並ぶ間もなく一気に抜け出す。馬群を後方に置き去りにすると、ふいにオルフェーヴルは内ラチに向かってヨレる。池添騎手がそれを修正しようとしたところ、口元のハミ輪（本来は口の外に出ている部分）がオルフェーヴルの口の中に入ってしまった。1着でゴールしたはいいが、ハミ輪のせいで制御ができない。レースが終わったのに止まらない。それどころか加速を続ける。向正面まで好きなだけ走って、外ラチ沿いめがけて突進。池添騎手を放り出して、彼の右の手まで踏ん付けた。池添騎手は右手の甲を3針縫う羽目になった。

結局、口取りの記念撮影もできない始末。騎手に怪我をさせるなんて、と池江師は顔面蒼白だった。救急車で検量室に戻ってきた池添騎手は痛みに顔を歪ませながら報道陣に語った。

「抜けてからモタれたのは課題だけど、いいもの持ってます」（日刊スポーツ２０１０年8月15日）

破天荒で繊細な気性こそあるが、その底力は注目に値したのだろう。翌日の新聞で、オルフェーヴルの勝利は新馬戦にもかかわらず、「ジャーニー全弟オルフェ暴走Ｖ」（日刊スポーツ同年8月15日）と写真付きで大々的に報じられた。

後に稀代の名馬となるオルフェーヴルだが、この頃はまだ、名馬の気まぐれな全弟に過ぎなかった。

隣の馬が恋しくて

「オルフェーヴル連勝濃厚」「オルフェーヴル可能性十分」「オルフェーヴル能力を全面的に信頼」（東スポ同年10月3日）

「東スポ競馬」1面のあちこちにオルフェーヴルの名前がちりばめられた第2戦、芙蓉S。気性面の幼さはさておき、新馬戦の強い勝ち方は確かなもの。兄ドリームジャーニー譲りの瞬発力も見逃せない。ファンからも1番人気に支持された。

一方、池添騎手は返し馬から慎重に運んでいく。

「この馬は乗ったら最後、降りるまで気を抜くわけにはいかない」

しかしゲートに入ったオルフェーヴルはまたしても他馬を恋しがって啼いてしまう。スタートすると先頭のホエールキャプチャがゆったりとしたペースを器用に刻み、自分の得意なレースに持ち込む。後に重賞を5勝する優秀な牝馬だ。ところがオルフェーヴルはこのペースにいら立ちを隠せない。挙句の果てには向正面で外へ逃げようとする。

ホエールキャプチャは余裕たっぷりに最終コーナーを先頭で駆け回り、自分のペースで先頭を守り続ける。後からついていくオルフェーヴルは新馬戦で見せた瞬発力を再び発揮し、他馬よりもはるかに大きなフットワークで飛んでくる。しかし終始自分のレースをこなした

ホエールキャプチャには首差、僅かに届かなかった。期待の全弟は2戦目を2着で終えた。

――この数時間後、遠くフランスで行われた凱旋門賞で日本馬ナカヤマフェスタが2着になった。未だ日本馬が制していない世界最高峰のレース。一時は先頭に立ち、勝ち馬と頭差の大健闘に日本中が沸いた。この時オルフェーヴルは2歳、まだ他馬を恋しがって啼くような幼い馬。そんな彼が凱旋門賞を沸かすまであと2年を待つこととなる。

芙蓉Sの後、池江師はオルフェーヴルの次走に東スポ杯2歳Sを想定していた。

「東スポ杯を経て、ゆくゆくは兄が制した朝日杯FSを兄弟制覇したい」

ところが鞍上の都合が合わない。池添騎手は同レースで期待馬イイデタイガーに乗ることが決まっていた。ならば、と池江師は11月の京王杯2歳Sに予定を変更した。

池江師は後に、「京王杯を選んだことがオルフェーヴルにとってよかったのかもしれない」（優駿2011年11月号）と語る。東スポ杯に出ていたらきっとそこそこの競馬をして、賞金も加算できずクラシックにも出られなかったかもしれない。

それほどまでに京王杯2歳Sでのレースぶりは課題を明るみにするものだった。本番前は「全兄ジャーニー級」（日刊スポーツ同年11月13日）、「スパっと切れる全兄ジャーニーなみ末脚」（サンケイスポーツ同年11月13日）と兄を引き合いに高い評価を受けていたが、いざゲートに収まると、またもや他馬を恋しがって啼き出してしまった。そのままゲートが開いてしまってスタートダッシ

ュに失敗、レースが進めば内ラチにへばりついて離れない。池添騎手は懸命に修正を試みるが、今度はそれに反発して引っかかる。冷静さを欠いたオルフェーヴルにはもう、直線で発揮する脚は残っていなかった。馬混みの中進路も見つけられない。いつもの力を出せないまま10着に大敗した。

性格が幼すぎるあまり本来の力を発揮しきれない。まずは自立心を育てないといけない。こうなってはもう、朝日杯兄弟制覇どころではなかった。そこでノーザンファームしがらきに放牧に出し、精神修行をはかることにした。群れの先頭を走らせ、あえて孤独な環境に身を置かせた。ゲートで寂しくて啼いてしまうオルフェーヴルには、苦しい修行だったかもしれない。でもこれが後に大きく効いてくると陣営は信じた。精神修行は年末まで続いた。

――さて、池添騎手が東スポ杯で騎乗したイイデタ

3歳初戦シンザン記念。鞍上が折り合いに徹してメンバー最速の上がり33秒5を記録するも2着。

イガーだが、不運にもレース中の事故でこの世を去った。オルフェーヴルと同じステイゴールドの仔。東スポ杯に出るほどの期待馬、もしかしたらライバルになっていたかもしれない。池江師は語る。

「謙一くんも僕も、オルフェーヴルが走るときはイイデタイガーの分までという意識でいます。（この後）急にオルフェーヴルが力をつけていったのも、あの馬が後ろで押しているからなんじゃないかと思っているぐらいです」（優駿２０１１年12月号）

自らの壁を越えられるか

「石坂師絶賛『すごいモノを持っている』」（サンケイスポーツ同年1月6日）

「牡馬相手も通過点　ドナウ堅軸」（サンケイスポーツ同年1月9日）

「展開不問ドナウ　生まれた時から桜を意識」（日刊スポーツ同年1月9日）

オルフェーヴルがレースから離れること2カ月、年明け始動戦のシンザン記念では牝馬ドナウブルーが注目を一身に集めていた。新馬戦は積極策、2戦目は後方からの切れ味勝負で完勝。ここまでの器用な2連勝は最優秀2歳牝馬をも脅かす可能性もあるという。一方のオルフェーヴルは新聞の隅に小さく、「若さは残るが重賞で通用する力はある」（サンケイスポーツ同年

1月6日）と数行に留まる。前走10着によるイメージダウンは避けられなかった。

オルフェーヴルは京王杯のような暴走を避けなくてはいけない。まず我慢を覚えないといけない。

迎えたシンザン記念、池添騎手は前有利の馬場とわかってはいたが、我慢のためにあえて後方で折り合いをはかった。直線に入れば確実に末脚を発揮、ドナウブルーをも退け2着を死守できた。決して悲観しなくてもいい。少しずつ折り合いを覚え始めている。

そして次戦のきさらぎ賞、ついにオルフェーヴルの大きな成長を垣間見ることになる。

道中は緩やかな流れとなり、やはり我慢できず行きたがる素振りを見せるオルフェーヴル。そして向正面半ばでトーセンラーが進出を開始、オルフェーヴルを脇目に捲り上げていった。つられてもおかしくない。我慢しなくてはいけない。ここでつられてしまったら、

3着に敗れたきさらぎ賞はウインバリアシオン（4着）と初対決のレースでもあった。

教えてきたことが台無しになる。

けれどオルフェーヴルはつられなかった。自分のポジションを守り、リズムを崩さずに走り続けた。3着にこそ敗れたが、池江師は確かな成長の手ごたえを感じていた。

「あそこで動くか動かないかが、その後の競走生活において大きなターニングポイントだったと思います」（優駿２０２１年10月号）

いずれは皐月賞、ダービーへ。

オルフェーヴルがクラシックに出るにあたり、意識しなくてはいけないのが出走権の獲得だった。クラシック初戦の皐月賞に出るには、賞金を加算するか、定められた前哨戦で優先出走権を獲得する必要がある。

この時点ではまだ収得賞金１２００万円の1勝馬。そこで池江師が次に選択したのは3月の前哨戦スプリングＳだった。

このレースは皐月賞の優先出走権を獲得できる最後のチャンス。朝日杯覇者グランプリボスも出走。一歩道中で危うくなれば、クラシック自体が危ぶまれる挑戦だった。

そんな矢先の3月11日、東日本大震災が発生した。震災の影響で電力供給などに課題を残す中山競馬場での競馬開催は難しく、例年中山で開催されてきたスプリングＳは急遽阪神競馬場に変更となった。

皐月賞出走をかけた最後のレース。スタート後間もなく2歳王者グランプリボスが果敢に先行、積極策をはかる。オルフェーヴルは中団後方で折り合いを意識する。

この時、池添騎手は気付いた。今までのように行きたがるところはない。見違えるほどにリズムよく走れている。そのままオルフェーヴルは自分のペースを刻みながらも最後のコーナーに向かって畳みかけていく。グランプリボスが先頭を走る中、大外からオルフェーヴルが強みの大きなフットワークで飛んでくる。2歳王者を並ぶ間もなくかわし、誰の追随も許すことなくダイナミックな足取りで決勝線に一番で飛び込んだ。遅くなってしまったが、これが新馬戦以来の白星にして初の重賞タイトルにして、皐月賞への最後の切符を獲得できた瞬間だった。

これまでの努力がついに実を結んだのだ。

戻ってきた池添騎手は声を上ずらせて、「先生、完璧でした！　折り合い」と池江師に興奮気味に話した。そして続く囲み取材で嬉々として語る。

「比べるのはかわいそうだけど、ドリームジャーニーの弟じゃなくて、オルフェーヴルって言われるように頑張ってくれれば」

「ドリームジャーニーの弟」から「オルフェーヴル」へ。黄金色の旅はまだ始まったばかりだ。

2011
クラシック三冠
―有馬記念

史上7頭目の三冠馬となったオルフェーヴル。
父・母・母の父とも内国産である三冠馬は歴代8頭のうち唯一でもある。

突き抜けた皐月賞、雨を切り裂いた日本ダービーから、
地響きのような歓声に迎えられた菊花賞へ。
特別な年に、愛おしい三冠馬が誕生した

哀しみの時代の皐月賞馬

この年の競馬は、誰もが胸に複雑な思いを抱いていたに違いない。

東日本大震災の余波は列島中に広がり、日々の報道は心を痛ませた。復興は依然として進まぬ中、競馬のみならずすべてのエンターテインメントにおいても自粛の雰囲気が漂っていた。春の競馬は例年通り開催されるのか。そもそもこんな中で本当に競馬を行ってよいのだろうか。ファンや関係者には、そんな自問自答があっただろう。

それでも競馬は走り続けた。東京、中山、福島の開催は中止されるものの、競馬の世界は今できることに努め続けた。騎手たちは進んで競馬場で募金を呼び掛けた。震災で止まってしまった東日本での開催は4月23日から再開、中山開催が困難となった皐月賞も、例年より1週遅れて、東京の開幕週に開催することに帰着した。競馬界が一歩ずつ進んでいこうとする意志が、この年の皐月賞を特別なものにしたのかもしれない。

「戦国」（デイリースポーツ2011年4月19日）と評された出走馬たちは、前哨戦をそれぞれ異なる馬が制する混戦模様。「不安ナイト」（ナカヤマナイト・デイリースポーツ同年4月21日）「皐月賞もディープ産駒だ　桜マルセリーナの次はバラード！」（ダノンバラード・サンケイスポーツ同年4月22日）――出走馬のそれぞれが大きな見出しとともに報じられた。

とりわけ注目はサダムパテックだった。同馬は出走馬中唯一の重賞2勝馬。鞍上は全国リーディングの岩田康誠騎手。内枠有利の東京２０００ｍで４番ゲートであることも後押しした。一方のオルフェーヴルは精神面が不安視され４番手評価に。それでも池添騎手は胸を張る。

「（京王杯10着について）その時とは体も精神面も違う。教えてきたことが身について、今のオルフェーヴルなら大丈夫」（サンケイスポーツ同年4月21日）

オルフェーヴルの変化は枠入りでも見て取れた。今までゲートでは他の馬を恋しがって啼いていたのに、今回は啼かない。スタートも普通に切るなどリズムよく走り、最内に取り付いてロスなく器用に最初のコーナーを回っていく。60秒３のスローペースが刻まれても、後方で自分のペースで走り続けられている。確かに成長している。サダムパテックはやや出遅れで後方寄りとなったが、枠順を活かして内目を器用に駆ける。

馬群は一団となり、迎えた最後の直線。この時、ＧＩの大歓声が東日本に帰ってきた。そしてオルフェーヴルの目の前にふいに1頭分、プレイとダノンバラードの間にスペースが開けた。直後、向かって左側のプレイが外に膨らもうとする。悩むまでもない。そのままオルフェーヴルは隙間めがけて躊躇なく突っ込んでいった。かつての臆病で泣き虫なオルフェーヴルならば、こんなことできただろうか。そこに追随するようにサダムパテックも同じ進路

第二部

一族の名馬と同時代のライバルたち

オルフェーヴル、ゴールドシップを筆頭に国内外のGI馬12頭を送り出した名種牡馬ステイゴールド。産駒の重賞勝利は116勝＝抜けた数値である。

偉大な父スティゴールドに連なる血脈から、
実力筆頭の貴婦人や凱旋門をともに走った帯同馬、
多彩な才能を発揮した産駒たちの蹄跡をたどる

ステイゴールド

世界への扉をこじ開けた黄金時代の人気者

1994年生まれ
牡
黒鹿毛

実力はあっても勝ち切れない。競馬界にはしばしばこんなファンに愛されるシルバーコレクターやブロンズコレクターが誕生する。オルフェーヴルの父ステイゴールドもそんな1頭だった。国内通算成績は［5・12・8・23］。このうち、GI2着が4回、3着も2回あるが、頂点には手が届かないでいた。

ただ、これは時代が悪かったというほかない。ステイゴールドが本格化を迎えた1998年ごろ、日本競馬史に残る黄金時代が訪れたのだ。同年の天皇賞・春はメジロブライト、宝塚記念はサイレンススズカと、それぞれ同期のライバルの前に2着。天皇賞・秋はサイレンススズカを悲劇が襲うなかオフサイドトラップの2着、年末の有馬記念は1歳下で最強世代の一角グラスワンダーの3着と惜しい競馬が続く。翌年の天皇賞・春と秋はそれぞれスペシャルウィークの5着&2着、宝塚記念は再びグラスワンダーの3着。さらに捲土重来を期した00年は3年連続となる古馬中長距離GI完全出走こそ果たすも、世紀末覇王テイエムオペラオーの壁は厚く、4着が最高着順だった。

錚々（そうそう）たるメンバーを相手に互角に渡り合ってきたが、仮に善戦マンのまま終わっていれば、

父 サンデーサイレンス
母 ゴールデンサッシュ
母の父 ディクタス

戦績 [7-12-8-23]
香港ヴァーズ
距離適性 長距離
脚質 先行・差し

おそらく種牡馬として大成功を収めることはなかっただろう。しかし、ステイゴールドがその身に秘めた真価を示すのは、まさにここからだった。

皮切りとなったのは01年のドバイシーマC（当時）だ。語り草となった当時の世界最強馬ファンタスティックライトとの激闘の末、見事に勝利を飾る。そして、国内4戦を挟んで向かった12月の香港ヴァーズ。最後の直線で前を行くエクラールは、奇しくもファンタスティックライトと同じゴドルフィン馬だ。後続を大きく引き離して逃げ込みをはかるエクラールとの差を一完歩ごとに詰め、今度もゴール寸前で図ったように差し切る。50戦目にして悲願のGI制覇を成し遂げるという、これ以上ないドラマで引退レースを締めくくった。さらに当時を振り返れば、今とは違ってまだ日本馬が海外で活躍する機会の少なかった時代だ。それだけに、香港ヴァーズ制覇の価値は計り知れないものだった。

ステイゴールドは引退後、ファンに愛される多くの個性派を世に送り出した。その最高傑作こそオルフェーヴルだ。父とは違い、3歳三冠を達成するなど早くから時代の主役を務めたが、阪神大賞典で見せた逸走など危うさを内包していたところはやはり親子だ。一方で、世界の頂に二度手をかけた海外競馬での高い適性もまた、ドバイ・香港で無類の強さを見せた父譲りといえる。だからこそ、今や日本の悲願となった凱旋門賞制覇の夢を、今度はその血を受け継ぐオルフェーヴル産駒に期待してしまうのだ。

（安藤康之）

メジロマックイーン

再注目された、日本競馬を牽引した名ステイヤーの血

1987年生まれ
牡
芦毛

サンデーサイレンスが日本に輸入される前、90年代前半はステイヤー全盛期。メジロマックイーンは間違いなく日本競馬を牽引した1頭といっていい。天皇賞・春の連覇などGⅠ4勝。GⅠ着外は二度しかない優等生だった。だが、種牡馬としてはサンデーサイレンスの前に完敗を喫し、成功したとは言い難く、同時に日本の競馬は中距離へシフトしていった。

2011年、すっかり過去の馬になってしまったメジロマックイーンは三冠馬オルフェーヴルによって再注目された。血統とは不思議で、1頭の名馬が現れると、過去から現在へ時空を超えて、突如、往年の名馬が甦ることがある。血をたくさん残し、定着させるのも大切だが、たとえ少ない血であっても、血統表から簡単には消えてなくなりはしない。オルフェーヴルの母オリエンタルアートの父としてメジロマックイーンは見事に復活した。翌年、二冠を制したゴールドシップの母ポイントフラッグの父でもあり、父ステイゴールド×母の父メジロマックイーンは黄金配合だと騒がれた。現代では当たり前になった血統用語「ニックス」なる言葉が競馬ファンに認知されたのは、オルフェーヴルの功績の一つだ。

それにしてもつくづく因果を感じざるを得ない。メジロマックイーンはサンデーサイレン

父 メジロティターン
母 メジロオーロラ
母の父 リマンド

戦績 [12-6-1-2]
菊花賞　天皇賞・春2勝　宝塚記念
距離適性 長距離
脚質 先行

スという巨星の輸入によって、その立場を奪われたといっても過言ではない。持久力と操縦性の高さが売りだったが、多少、操縦難であっても、最後の爆発的な瞬発力で逆転できるサンデーサイレンスの血には敵わなかった。だが、その血を継ぐステイゴールドと交配されると、瞬発力も持久力もある産駒が出現し、チャンピオンの座を射止めた。メジロマックイーンの柔軟な筋肉とやや硬さが残るステイゴールドが互いの短所を消し、長所を伸ばし合う。オルフェーヴルの走りは姿勢が低く、俊敏な猛獣のようであったが、あれはメジロマックイーンの柔らかさとステイゴールドの気性が成せる業だったに違いない。阪神大賞典で逸走からレースに復帰する際の走りはまさにそれだ。

だが、このニックスは決して不思議ではないかもしれない。メジロマックイーンはその座を奪われたサンデーサイレンスが気を許す唯一の馬だったというエピソードがある。ご存じの通り、サンデーサイレンスは人を寄せつけない獰猛な一面があり、周囲のサラブレッドを威嚇して歩くほどだったが、メジロマックイーンとは馬が合った。生前の映像をみると、ちょっかいを出すサンデーサイレンスを悠然と受け流しているだけのようにみえるが、サンデーサイレンスは隣にメジロマックイーンがいると、のんびり牧草を食む芦毛をじっと見つめるなど、満更ではなかったという。サンデーサイレンスに気性面で酷似していたステイゴールドとの共鳴はもしかすると、必然だったかもしれない。

（勝木淳）

ドリームジャーニー

「黄金配合のパイオニア」は最軽量のＧＩ馬

2004年生まれ
牡
鹿毛

２０２４年の宝塚記念でＧＩ初制覇を決めたブローザホーン。重馬場の２２００ｍを後方から差し切った末脚は見事だったが、それ以上に驚いたのが馬体重だった。４３０キロ未満でのＧＩ勝利はグレード制後の芝ＧＩ馬として28例目であり、牡馬としては４番目の軽量馬勝利だった。

ゴールイン直後に思い浮かんだのが、牡馬として２番目に軽かったドリームジャーニーである（もっとも軽かったのは87年ジャパンＣ優勝馬ルグロリュー＝４１０キロ）。

ステイゴールド×メジロマックイーンの「黄金配合」として初のＧＩ馬となった同馬は、同配合のオルフェーヴルもゴールドシップも出走していない朝日杯ＦＳを制して２歳王者となった際に４１６キロで、５歳時に宝塚記念を制した際も４２４キロ。日本国内生産の牡馬として、いまだに破られていない最軽量王者である。ちなみに父ステイゴールドは香港ヴァーズを勝った際が４３０キロで、３歳時の初勝利は４１８キロだった。

しかし、ドリームジャーニーのパドックをみると、ほかの馬より小柄にもかかわらず、迫力を感じる馬体だった。小回り中山で行われた朝日杯では「この小さい馬をどのように追い

父 ステイゴールド
母 オリエンタルアート
母の父 メジロマックイーン

戦績 ［9-3-5-14］
朝日杯FS　宝塚記念　有馬記念
距離適性 中距離
脚質 差し・追い込み

上げていくのでしょう」とのアナウンスがあった数秒後、3コーナーでスパートすると大外から直線一気で14頭をごぼう抜き。2着馬は後にスプリントGⅠ春秋制覇を果たしたローレルゲレイロだった。

低く沈むフットワークで末脚に賭ける走りだったが、3歳になると皐月賞8着、ダービー5着。2歳王者には早熟型も多く「ここまでか？」と感じたが、秋初戦の神戸新聞杯を勝つと4歳時は中距離路線を走りGⅢを2勝。5歳春の産経大阪杯で1世代下のダービー馬ディープスカイや有馬記念の覇者マツリダゴッホを下すと、宝塚記念では後方から鋭い末脚を披露しGⅠ2勝目を挙げたが、このレース直前、筆者は二つの相反する想いをもっていた。

「2歳王者の5歳GⅠ制覇などそうはいない」「父ステイゴールドと同じく故障もせず走り続けている」。――後者が正解だった。ちなみに前者は後にロゴタイプ（6歳で安田記念）とドウデュース（5歳で秋の天皇賞&ジャパンC）が果たしている。

年末には有馬記念も制しグランプリを連覇。〝ステイマック〟の後輩であるオルフェーヴルとゴールドシップも後に有馬記念を勝っているが、ドリームジャーニーの活躍があってこそ、オルフェーヴルという稀代の三冠馬が誕生したのだろう。

全兄弟でのGⅠ馬はダンスパートナー&ダンスインザダーク、アルアイン&シャフリヤールなど数例あるが、GⅠ勝利数合計9勝＝「抜けた2頭」だ。

（小川隆行）

オリエンタルアート

産駒がＧＩ計９勝…名馬の母が送った「幻の馬」

1997年生まれ
牝
栗毛

天皇賞・春連覇などＧＩを４勝し、史上初めて獲得賞金が10億円を突破したメジロマックイーン。種牡馬としてＧＩ馬を送り出すことはできなかったものの、不思議と牝馬の活躍が目立った。オルフェーヴルの母オリエンタルアートも、その中の１頭である。

栗東・田所清広厩舎の所属となったオリエンタルアートがデビューしたのは３歳の２月末。阪神ダート１８００ｍの新馬戦で３着に好走すると、２戦目で初勝利を手にした。その後、忘れな草賞で初めて芝のレースを経験したものの、ここは13着と大敗。以後、年内はダートに専念し、12月に２勝目、年明け初戦に３勝目を挙げた。結果的には、これが最後の勝利となるも、４歳春には格上挑戦で重賞の京都牝馬Ｓと中山牝馬Ｓに出走し、現級に戻った６月のタイランドＣでは単勝１２０倍の低評価を覆して２着に好走。芝で初の連対を果たした。

その後、翌年の加古川特別11着が最後のレースとなり、生まれ故郷の白老ファーム（現・社台コーポレーション白老ファーム）で繁殖入りすることが決定したが、手にした３勝はいずれも池添謙一騎手とのコンビであり、そこに運命めいたものを感じずにはいられない。

そんなオリエンタルアートの繁殖としての特徴は、なんといっても仔出しが良かったこと

父　メジロマックイーン
母　エレクトロアート
母の父　ノーザンテースト

戦績　[3-1-1-18]
4歳以上900万下
距離適性　短～中距離
脚質　逃げ・先行

ではないだろうか。初仔のドリームジャーニーから最後の産駒となったデルニエオールまで、12年間で計11頭を出産。そのうち7頭がステイゴールドとの間に産まれた産駒で、牡馬5頭（後にセン馬になった2頭を含む）、牝馬6頭とバランスも良かった。

また、どうしてもオルフェーヴルとドリームジャーニーの実績に目がいってしまうが、ひょっとすると、これら2頭に匹敵するくらいのポテンシャルを秘めていたと思わずにいられないのが、2番仔の牝馬アルスノヴァである。

ダンスインザダークの産駒で兄と同じ池江泰寿厩舎からデビューしたアルスノヴァは、2歳10月の新馬戦で2着に惜敗するも、中3週で臨んだ未勝利戦を快勝。さらに、12月のエリカ賞も連勝した。このエリカ賞を勝利した馬は、後に4頭がダービーを制覇。それ以外に3頭がGⅠを勝つなど、出世の登竜門といってもよいレース。残念ながら、アルスノヴァはこの翌月に屈腱炎を発症し引退、繁殖入りとなってしまったが、脚元さえ無事であれば、重賞タイトルはもちろん、産駒3頭目のGⅠ馬になっていたかもしれない。

それでも、オリエンタルアートの繁殖としての実績は極めて優秀で、2頭以上の産駒がJRAのGⅠを計9勝したのは、ダイワメジャー、ダイワスカーレット兄妹の母スカーレットブーケと並び歴代最多タイ。残念ながら、自身はデルニエオールを出産した3日後に18歳でこの世を去ってしまったが、その実績は今も色褪せず燦然と輝いている。

（齋藤翔人）

8号族

アーモンドアイ、エアグルーヴらを輩出

血統を語る上で大事な要素の一つが、ファミリーナンバーだ。ファミリーナンバーは長い歴史を持つメジャーな視点で、ＪＲＡの公式サイトで「ブルース・ロウという人が、ダービー、セントレジャー、オークスの第1回からの勝ち馬の牝系を調べたところ、43頭の馬にたどりついた。その中で3大レースの勝ち馬を多く出している順番に第1族から43に分類し、各々の番号の直系牝馬と直仔をその番号で示したものがファミリーナンバーである。現在では番号も更に追加され、若い番号イコール優秀、とはいえなくなっているが、牝系分類上便利なので現在も利用されている」（ＪＲＡ公式サイトより引用）と説明されている。１８９５年ごろにまとめられた分類が今もなお引き継がれているのである。オルフェーヴルはこのファミリーナンバーにおける8号族、その中でも【8－c】と呼ばれる系統に属している。

8号族は、【8－a】、【8－b】といったように、更に分岐して発展。【8－d】ではヴィクトワールピサ、【8－h】ではシンボリクリスエスやキングヘイロー、【8－k】ではロゴタイプやミスターメロディらが活躍している。分岐しているとはいえ8号族は全体的に中山競馬場での活躍馬が多く、それ以外では安田記念や高松宮記念などの優勝馬が多い印象を受

ける。安田記念の勝ち馬アサクサデンエンやエアジハードもまた、8号族の活躍馬である。

オルフェーヴル・ドリームジャーニーが含まれる【8－c】の代表馬はほかにメジロライアンやフサイチペガサス、グランプリボスらが挙げられる。オルフェーヴルと同じく池江泰寿厩舎のソウルラッシュも【8－c】。思えばメジロライアンも現役時代の7勝のうち4勝は中山競馬場と、例に漏れず中山巧者と言える。グランプリボスとドリームジャーニーも中山開催時代の朝日杯FSを制覇して2歳王者に輝いた。

一方で、中山競馬場ではなく東京競馬場で強さを見せるのが【8－f】の馬たちで、日本ではダイナカールを中心に血を広げている。ダイナカールとエアグルーヴはオークスを母娘制覇と、府中で強さを見せた。他にもフサイチパンドラ・アーモンドアイは【8－f】だが、アーモンドアイも歴史に名を残す東京巧者である。フサイチパンドラとエアグルーヴも、どちらも牝馬ながら札幌記念を制しているという点も興味深い。競馬の黎明期に分岐した各ラインが今もその個性を引き継いで影響力を持っていると考えると、血統のロマンである。

エアグルーヴの仔であるルーラーシップは香港GIの勝ち馬だが、ヴィクトワールピサやアーモンドアイも海外GIの勝ち馬。ソウルラッシュやグランプリボスも香港マイルで馬券圏内に食い込んでいる。オルフェーヴルがフランスでも活躍したのはステイゴールドの血によるものと思われがちだが、もしかすると8号族由来のものなのかもしれない。（緒方きしん）

ウインバリアシオン

勝てなかったライバルとの「記憶」に残る戦い

2008年生まれ
牡
鹿毛

２０２４年の菊花賞で、ウインバリアシオン産駒のハヤテノフクノスケがＧＩ初出走を果たした。父のような走りはみられなかったが、レース後、10年前の自分を思い出した。

ウインバリアシオンは私の競馬観を作ってくれた馬だった。一口馬主として出資した最初の馬でもある。クラブのパンフレットを目にすると「母スーパーバレリーナ」に目を魅かれた。長距離で走りそうな体型に見えて、一口価格も４万５千円とお手頃だった。

８月のデビュー戦を勝ち、２戦目の野路菊Ｓを連勝すると出資額は戻ってきた。その後重賞で３戦とも４着以下だったが、青葉賞を最後方からの直線一気で快勝すると、私は震えが止まらなかった。知り合いの個人馬主が「一度でいいから出走させたい」と語っていたダービーへの出走が決まったのだ。

ダービー当日、東京競馬場に足を運んで愛馬を見つめ続けた。前年までは「どの馬が勝つか」との予想が楽しかったが、予想など浮かばない。「青葉賞馬は勝てない」とのジンクスもまるで頭になかった。ゲートが開くとオルフェーヴルとともに後方からレースを進め、同馬と同じスパートで前を交わしていく。残り１００ｍでオルフェーヴルをとらえそうになると

父 ハーツクライ
母 スーパーバレリーナ
母の父 Storm Bird

戦績 [4-7-2-10]
青葉賞　日経賞
距離適性 中・長距離
脚質 差し

「バリ！　バリ！　バリ！」と声が枯れるほど叫んだが、差は縮まらず1馬身3／4届かずの2着。もの凄く悔しかったが、先述の馬主に「ダービー2着なんて凄すぎる。いい馬に投資したね」と言われた。

後で聞いた話によると、ダービー当日は裂蹄しており、陣営も出走に関して不安をもっていたという。100％の状態ではない状況で、かのオルフェーヴルに最も詰め寄ったのである。

秋は神戸新聞杯・菊花賞ともオルフェーヴルの2着。古馬になり春の天皇賞では初めてライバルに先着（3着）したが、続く宝塚記念（4着）のレース後に屈腱炎を発症してしまう。「引退するかも…」と悲しくなったが、愛馬は1年半近くの休養を経てターフに戻ってきた。

5歳初戦の金鯱賞。パドック映像でプラス30キロと表示され「さすがに厳しい」と感じたが後方から追い上げ3着に食い込む。次走の有馬記念でオルフェーヴルと七度目の対戦を迎えた。かつてのライバルは凱旋門賞を2年連続2着と世界的な名馬となり、有馬記念でターフを去ることが決まっていた。偉大さを感じてレースを見つめると、後続を8馬身突き放すオルフェーヴルの圧勝劇。1秒以上突き放されつつ、愛馬は2着を確保した。

ライバルの引退後、日経賞で重賞2勝目を挙げると、次走の天皇賞でまたも2着。7歳まで走り続け投資金額は30倍以上となったが、何より脳裏に激しく刻まれているのが「オルフェとの戦い」だった。

（織田茂典）

ゴールドシップ

一度だけ実現した黄金配合同士の対決

2009年生まれ
牡
芦毛

ブラッドスポーツである競走馬生産において、血統は非常に重要なファクターだ。例えば、3代前と4代前に同じ馬を持つ馬を配合する3×4。奇跡の血量とも呼ばれる血統理論からは世界中で名馬が誕生している。このように優れた馬を生み出しやすい相性のいい組み合わせというものが存在するなか、オルフェーヴルと兄ドリームジャーニーの活躍もあって、父ステイゴールドと母父メジロマックイーンの配合に注目が集まるようになる。しかし、2頭は同じ父と母を持つ兄弟馬。たまたま両親の相性が良かっただけの可能性もあった。ところが、母が異なる組み合わせからもう1頭の名馬が出現する。オルフェーヴルの一つ下の世代で、父ステイゴールド、母ポイントフラッグの間に誕生したゴールドシップだ。

2015年の宝塚記念で世紀の大出遅れを打ち嚙まし、一瞬にして約120億円分の馬券を紙くずに変えた120億円事件をはじめとした破天荒キャラの印象も強いが、実力は間違いなく本物。3歳時には皐月賞と菊花賞のクラシック二冠に輝き、その余勢を駆って年末のグランプリレース有馬記念も制覇。古馬になってからも13年&14年の宝塚記念、15年の天皇賞・春とGⅠを6勝。オルフェーヴルに続いて大レースを勝ちまくる名馬が誕生したことか

父 ステイゴールド
母 ポイントフラッグ
母の父 メジロマックイーン

戦績 [13-3-2-10]
皐月賞　菊花賞　有馬記念　宝塚記念2勝
天皇賞・春
距離適性 長距離
脚質 差し・追い込み

ら、父ステイゴールドと母父メジロマックイーンの組み合わせは黄金配合として広く認知されるようになった。

では、一体どちらが強いのか。当時の競馬ファンの興味はこの1点に集まるも、5歳時のオルフェーヴルが前年敗れた凱旋門賞を見据えたローテーションを歩んだことで、両雄が顔をあわせる機会はなかなか訪れなかった。そんな黄金配合同士の対決が13年の有馬記念でついに実現。レース前にはここを最後にオルフェーヴルは引退と発表されていた。1回限りのガチンコ対決となったことで、当日の中山競馬場は異様な熱気に包まれていた。

16頭が出走するなか、オルフェーヴルが1・6倍の1番人気、ついでゴールドシップが4・4倍の2番人気の支持を集め、あとはすべて2ケタオッズという完全な二強ムードでレースが始まる。スタート直後から中団後方につけたゴールドシップのすぐ後ろにオルフェーヴルという隊列でたんたんと進むなか、3コーナーのカーブでオルフェーヴルが仕掛ける。一気に前を飲み込むと、先頭で最後の直線へ。ゴールドシップの鞍上ムーアも必死に手綱を扱いて抵抗を試みるが手応えの差は歴然。後続との差を広げるオルフェーヴルとは対照的に、いつもの末脚が影を潜めるゴールドシップはウインバリアシオンを交わせず3着に終わった。

9馬身半という予想だにしない大差で幕を閉じた黄金配合対決だが、現在はともに種牡馬として活躍中。両雄の対決・第2ラウンドは続いている。

（安藤康之）

第三部

オルフェーヴルを語る

あの激しさと強さはどこから来るのか？
血統論、馬体論の専門家と関係者が語り尽くす
小さな馬体に秘められた無限のポテンシャルとは

ダービー馬として史上最軽量の444キロながら
極悪馬場を乗り越えるパワー＆スタミナ。
走法を覚えると短所は極めて少なくなった。

血統

馬体

育成

厩舎

海外遠征

種牡馬

血統

凱旋門賞好走は「父系から受け継いだポテンシャル」

強力な長距離能力と道悪特性を産駒に伝えた
その種牡馬能力はディープに迫ったかもしれない

競馬評論家　栗山求

大種牡馬サンデーサイレンスは、１９９５年から２００７年まで13年連続でチャンピオンサイアーの座につき、あらゆる種牡馬記録を塗り替えました。国内外で供用された後継種牡馬は１５０頭以上。このなかで最も多くのＪＲＡ重賞を勝った種牡馬はディープインパクト、次点がオルフェーヴルの父ステイゴールドです。

１位ディープインパクトは２９５勝（24年12月現在）、２位ステイゴールドは１１６勝。両者には倍以上の差があります。ただし、能力差はそこまで大きくなかったはずです。

ステイゴールドは7歳暮れに現役生活を退いたあと、社台スタリオンステーションに種牡馬入りすることなく、ブリーダーズ・スタリオン・ステーションとビッグレッドファームを2年ごとに往復する形で供用されました。

ラストランの香港ヴァーズ（香港ＧⅠ・芝２４００ｍ）を勝ったとはいえ、獲得したＧⅠタイトルはこのレースのみ。国内最終戦の馬体重は４２８キロと牡馬にしてはかなり小さく、気性

の難しさは誰もが知るところでした。そうした点がネックとなり、社台レースホースの所有馬だったにもかかわらず、外部に放出されることになりました（シンジケート会員が所有する本株のうち4分の1を社台グループが所有したので完全売却ではありません）。

サンデーサイレンスは社台スタリオンステーションに繋養されたため、主要な後継種牡馬のほとんどは、父と同じ社台スタリオンステーションで種牡馬入りしました。産駒の重賞勝利数が20勝を超える後継種牡馬は11頭を数えますが、他の種馬場で種牡馬入りしたものはステイゴールドのみです。

社台スタリオンステーションに繋養されないということは「繁殖牝馬のランクが落ちる」ということでもあります。しかし、そうしたハンディキャップを乗り越え、ステイゴールドはサンデーの後継種牡馬のなかで2番目となる116ものJRA重賞勝利数を積み上げました。ハーツクライ（87勝）、フジキセキ（78勝）、ダイワメジャー（54勝）よりも上なのですから、そのポテンシャルの高さは推して知るべしです。もし仮に、社台スタリオンステーションに繋養され、もっとハイレベルな繁殖牝馬と交配する機会を与えられていたら、1位ディープインパクトとの差は詰まっていたでしょう。

オルフェーヴルの母の父メジロマックイーンは、天皇賞・春（2回）、菊花賞、宝塚記念などを制したスタミナ型の名馬。無敗の二冠馬トウカイテイオーに初めて土をつけた92年の天

皇賞・春は、90年代有数の名勝負として語り継がれています。また、18着に降着されたとはいえ、不良馬場の天皇賞・秋で後続に6馬身差をつけて1位入線したレースは、並外れた道悪適性を証明するものでした。

引退後、種牡馬としてはほどほどの成績で、総合種牡馬ランキングの最高順位は21位。10位以内どころか20位以内も入れませんでした。しかし、母の父としては優秀で、なかでも「父ステイゴールド、母の父メジロマックイーン」の組み合わせは、血統史にひときわ輝くニックス（相性のいい組み合わせ）となりました。三冠のほかに有馬記念2回、宝塚記念を制覇したオルフェーヴルの他に、その全兄ドリームジャーニー（有馬記念、宝塚記念、朝日杯FS）、中長距離で無敵を誇ったゴールドシップ（皐月賞、菊花賞、有馬記念、天皇賞・春、宝塚記念2回）、フェイトフルウォー（セントライト記念、京成杯）など大物を連発しました。

ステイゴールド産駒の芝平均勝ち距離は１９４０ｍ。サンデーサイレンスの主要な後継種牡馬のなかでは最長です。また、母の父メジロマックイーンもスタミナ型。したがって、この組み合わせから誕生した馬は強力なスタミナに恵まれています。ステイゴールドとメジロマックイーンはいずれも道悪巧者なので、そうした特長も伝えました。この組み合わせは芝２２００ｍ以上の重賞を計19勝し、うち12勝はＧＩレース。驚くべき成績です。

ステイゴールドの系統は、国内にとどまらず凱旋門賞（仏Ｇ１・芝２４００ｍ）でも特筆すべ

き成績を挙げました。10年にナカヤマフェスタが2着、12、13年にオルフェーヴルが2着、23年にスルーセブンシーズが4着となっています。

凱旋門賞は、雨にたたられて馬場が悪化しやすい秋のパリ・ロンシャン競馬場で行われるため、こうした馬場に高い適性を持つサドラーズウェルズを抱えた馬が強い、という著しい血統的傾向が見られます。10年以降の過去15年間で、サドラーズウェルズを持たずに凱旋門賞を勝った馬はたった2頭しかいません。わが国の芝競馬は、世界有数の高速馬場で行われるため、どの馬が渡仏したとしても、道悪になれば一度も経験したことのない未知のコンディションとなり、適性面に大きなビハインドを抱えることになります。わが国で育まれたステイゴールドの子孫が、凱旋門賞で再三にわたり上位入線を果たしているのは驚嘆すべきことです。

2〜4着に食い込んだ前述の3頭のうち、オルフェーヴルは「ステイゴールド×メジロマックイーン」、スルーセブンシーズは父ドリームジャーニーがオルフェーヴルの全兄ですから、やはり「ステイゴールド×メジロマックイーン」の組み合わせを抱えています。ヨーロッパ最高峰の2400m戦で互角の勝負に持ち込んでしまうほど、このニックスはスタミナとパワーに関して優れたものを伝えます。

オルフェーヴルの全兄ドリームジャーニーはピッチ走法。それゆえに直線の短い小回りコ

ース専用でした。オルフェーヴル自身はサンデー系らしいストライドの広さを保ちつつ、ピッチ走法で駆けるハイブリッド型。だからこそ、直線の長短を問わず、道悪だろうが高速馬場だろうがハイレベルなパフォーマンスを披露しました。

オルフェーヴルは引退レースの馬体重が４６６キロ。種牡馬としては決して大きくありません。しかし歴史上、ハイペリオン、リボー、ノーザンダンサーなどは小柄な馬格で世界の血統に大きな影響を及ぼしました。日本で供用されたノーザンテースト、ディープインパクト、ステイゴールドも小柄です。馬格面のハンディキャップをはねのけて非凡な能力を伝えられるのは、ポテンシャルがよほど優れている証拠です。

オルフェーヴル産駒は、ダート向きの適性が素晴らしく、ウシュバテソーロ（ドバイワールドC）とマルシュロレーヌ（ブリーダーズCディスタフ）が海外のビッグレースを制覇しています。この底力はオルフェーヴル産駒ならではでしょう。芝でもラッキーライラック（エリザベス女王杯2回、大阪杯、阪神JF）やエポカドーロ（皐月賞）が活躍しています。

いつの日か、オルフェーヴル自身と同じく凱旋門賞に挑戦する仔が現れることを期待したいものです。

オルフェーヴル 5代血統表

ステイゴールド 1994 黒鹿毛	サンデーサイレンス Sunday Silence(米) 1986 青鹿毛	Halo 1969 黒鹿毛	Hail to Reason 1958 黒鹿毛	Turn-to
				Nothirdchance
			Cosmah 1953 鹿毛	Cosmic Bomb
				Almahmoud
		Wishing Well 1975 鹿毛	Understanding 1963 栗毛	Promised Land
				Pretty Ways
			Mountain Flower 1964 鹿毛	Montparnasse
				Edelweiss
	ゴールデンサッシュ 1988 栗毛	ディクタス Dictus(仏) 1967 栗毛	Sanctus 1960 黒鹿毛	Fine Top
				Sanelta
			Doronic 1960 栗毛	Worden
				Dulzetta
		ダイナサッシュ 1979 鹿毛	ノーザンテースト 1971 栗毛	Northern Dancer
				Lady Victoria
			ロイヤルサッシュ 1966　鹿毛	Princely Gift
				Sash of Honour
オリエンタルアート 1997 栗毛	メジロマックイーン 1987 芦毛	メジロティターン 1978 芦毛	メジロアサマ 1966 芦毛	パーソロン
				スキート
			シエリル 1971 鹿毛	スノッブ
				Chanel
		メジロオーロラ 1978 栗毛	リマンド 1965 栗毛	Alcide
				Admonish
			メジロアイリス 1964　黒鹿毛	ヒンドスタン
				アサマユリ
	エレクトロアート 1986 栗毛	ノーザンテースト Northern Taste(加) 1971 栗毛	Northern Dancer 1961　鹿毛	Nearctic
				Natalma
			Lady Victoria 1962 黒鹿毛	Victoria Park
				Lady Angela
		グランマスティーヴンス Grandma Stevens(米) 1977 栗毛	Lt. Stevens 1961 鹿毛	Nantallah
				Rough Shod
			Dhow 1968 芦毛	Bronze Babu
				Coastal Trade

第四部

オルフェーヴルの記憶

震災の影響で東京開催となった皐月賞。
4番人気のオルフェーヴルは1番人気サダムパテックに3馬身差の圧勝をしてみせた。

主戦の池添謙一騎手を振り落としたり、
阪神大賞典で見せた制御不能からの大激走。
心を震わせる唯一無二の個性派名馬の逸話とは？

記憶 1

震災の年の三冠馬は「希望の星」

中央競馬も大きな被害をうけたあの年、運命をも味方につけて掴んだ栄光

２０１１年3月11日午後2時46分。

あの頃、私は早朝から午前中いっぱい働くという厩舎関係者のような仕事をしていた。金曜日だったので、そろそろ近所のコンビニに競馬新聞が並ぶ時間だろうと昼寝から目覚めた直後のことだ。起震車でしか体験したことがない揺れに眠気は吹き飛んだ。這ってテーブルの下に避難し、メダカの水槽を押さえようと懸命に手を伸ばしたことを鮮明に記憶している。テレビに映された東北から関東の太平洋沿岸を襲う大津波に言葉を失った。

翌日に予定されていた中央競馬はすべて中止になった。福島競馬場は甚大な被害を受け、なにより美浦トレセンは断水など深刻な事態に陥った。ＪＲＡは翌週から西日本地区で「東北関東大震災被災地支援競馬」実施に踏み切る。クラシック前哨戦など重要な時期でもあり、なにより被害を免れた西日本地区での競馬には社会的意義が大きかった。美浦の関係者もレースに向けて気持ちを高ぶらせた馬たちの状態を案じた。自分たちの飲み水さえ確保できな

い状況ながら、翌週の阪神へ管理馬を送り出した陣営のホースマンシップに心を打たれた。

幸い私は不安こそ渦巻くものの、被害と呼べるようなことはなかった。なんとか競馬新聞を慣れないインターネット経由で入手し、復興への願いを馬券に込めた。コロナ禍の自宅ウインズ化もそうだが、人は危機に瀕することで、新しい道を探り、どうにか日常を維持しようとする。激しく揺れ動く足元を収めようと必死だった。競馬に参加できるだけでも恵まれている。だからやるべきことをやろう。そんな心境だった。

当時、オルフェーヴルは震災の翌週に中山で行われるスプリングS出走を予定していた。スケジュールの組み直しにより、スプリングSは1週間順延、舞台は中山から阪神に移された。2歳時に関東の重賞で大敗しただけに、2、3着と好走中の地元での競馬はプラスに働いた。それだけではない。コーナー4回の忙しい競馬になる中山内回りから阪神外回りに変わったのも味方した。かくしてオルフェーヴルは阪神スプリングSで重賞初制覇を遂げた。スローに近い流れを馬群の外目で懸命になだめられ、3コーナーからじわりと進出、抜群の手応えで先団にとりつくと、直線で弾けた。上がり600m34秒3は最速タイ。瞬発力と力強さが同居していた。

スプリングS勝利によってクラシック出走の権利を手にしたことを考えると、通常通り、中山で施行されていたら、どうなっていただろうか。戦いながら逞しくなった三冠馬だけに

春先は危うい面も多かった。もし、中山だったら、三冠レース出走さえ逃していた可能性もある。当時のオルフェーヴルはそう思えるだけの脆さを抱えていた。

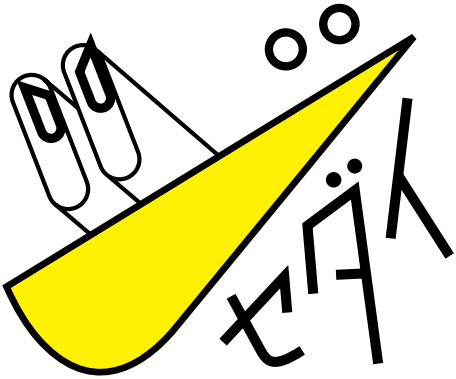
その想像を延長させるなら、皐月賞が中山から東京へ移ったのもオルフェーヴルに味方したのではないか。中山の被害は想像以上であり、皐月賞の開催は早い段階で断念された。代わって東京が1週間早く開幕する形をとり、皐月賞は東京開幕週に行われた。例年の中山最終週と東京開幕週では、舞台も違うが、馬場コンディションがまるで異なる。翌年の皐月賞でゴールドシップが内ラチ沿いをワープしたが、ライバルたちが悪い内側を避け、外へ行ったから実現した現象でもある。トリッキーな中山だったらどうなっていただろうか。もちろん、その後のオルフェーヴルを考えれば、こなした可能性は高いが、皐月賞の時点では、日程が崩されたことが三冠達成への第一歩だったと考える方が自然だろう。とはいえ、皐月賞では4番人気。チャンスはあるが、絶対ではない。これが当時の立ち位置でもあった。1番人気サダムパテックは震災直前の弥生賞を勝っていた。2番人気ナカヤマナイトも同じく共同通信杯を勝ち、ここまで待機していた。3番人気ベルシャザールはスプリングSで破った相手だが、前年ホープフルSなどで安定感を評価された。それでもオルフェーヴルは皐月賞を勝った。中山の皐月賞を走らずに三冠馬に輝いたのは、横浜で現在の皐月賞を行ったセントライトと皐月賞が東京だったシンザン、そしてオルフェーヴルしかいない。

中山の皐月賞を走らなかったオルフェーヴルは三冠達成の暮れ、有馬記念に駒を進め、初めて中山のＧⅠを走ることになった。

有馬記念は1年間の記憶を呼び覚ます役割がある。11年は東日本大震災に大きく運命を狂わされた年だ。想像を絶する被害状況をテレビで目にしたあの日、すべての日本人が心を被災した。これは決して大袈裟ではない。3月11日を境に、多くの人々が人生観を問い直し、生きることの意味を探すようになった。時に絶望を味わい、心の底にある哀しみに気持ちが折れかけた。オルフェーヴルはそんな年に三冠をとった。クラシック三冠はどの年であっても価値ある偉業である。だが、11年の三冠は特別な意味をもつ。陳腐な物言いかもしれないが、希望だったのだ。それもたどり着く過程で、やんちゃな振る舞いをし、たくさん負けたオルフェーヴルだから、たまらない。たとえ上手くいかなくても、段階を踏んで前へ進みさえすれば、いつか強くなり、それが栄光の道へつながる。オルフェーヴルの軌跡はまさに勇気そのものでもあった。

そんな11年を象徴するオルフェーヴルが有馬記念を勝った。並みいる古馬に包囲され、最終コーナーでは後方のインという絶望的なポジションからの勝利は、我々にあきらめない力を授けてくれた。一寸先は闇を体現した年でもあったが、遠くには必ず希望があることも教えられた1年でもあった。オルフェーヴルが主役でよかったと心から思う。

（勝木淳）



何と闘うか？

https://ji-sedai.jp

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント　著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！　行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研　若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み　既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!